

日赤看護婦留学第1号田淵まさ代の人物と生涯 (一)

田村 典子 塚原 浩子 高田 節子

広島県立保健福祉短期大学看護学科

抄録

田淵まさ代は日本の近代看護の黎明期にあつて、大正10(1921)年英国ロンドンで開催された第2回国際公衆衛生看護講習会に参加した。大正9(1920)年赤十字社連盟第一回総会で、各国赤十字社の事業の1つに公衆衛生看護婦養成が決議され、各国から講習生を派遣し第1回は既に前年に開かれている。第1回は期日の切迫の為派遣は見送られたが、第2回講習会には女学校時代から英語の学習研鑽を積み英語力に堪能なまさ代が選ばれた。帰国後まさ代は講習会での学習とヨーロッパ各地の施設で見聞した看護事情を報告書にまとめ、いくつかの提言をしている。なかでも英語教育の必要性に関する提言は内地留学制度導入の契機となり、その制度で何人もの国際的に活躍した看護婦が生まれた。まさ代はまた救護看護婦や社会看護婦の養成に従事した。パリで事故に遭われた北白川宮妃殿下の看護に選ばれて派遣された。またシベリア派遣救護班の婦長としても活躍し、こうした功績に対して昭和12(1937)年ナイチンゲール記章が授与された。

キーワード：田淵まさ代，内地留学制度，日赤看護婦，公衆衛生看護

はじめに

田淵まさ代は日本の近代看護の黎明期にあつて、日赤看護婦外国留学第1号となり、大正10(1921)年英国ロンドンで開催された第2回国際公衆衛生看護講習会に参加した。このことによつて、彼女は現在の保健婦教育のさきがけとなった。既に没後20数年過ぎているが、田淵まさ代についての先行研究は雪永¹⁾や亀山²⁾らのものがあるが少ない。日本における近代看護の黎明期に活躍した多くの看護婦は熱心なキリスト教の信者であつた。女学校時代の恩師、竹内文は敬虔なるクリスチャンである。筆者らは、まさ代が看護を選択しその後行つた活動に対して大きな影響を与えた人物として竹内文の存在が大ききと考えた。しかしながら竹内文との関係について記述されたものは少ない。そのため先行研究を踏まえながら、まさ代の業績とともに記録にとどめておく必要があると考えた。今回は田淵まさ代の看護における業績とともにその人となりを岡山県在住のまさ代の孫の恒男氏と久子さん(実際は甥と姪にあたり、日赤本社退職後同居、余生をともに過ごす)から聞き取りを行い、ここにまさ代の看護における業績の背景となるものを報告するものである。

生い立ち



図1 田淵まさ代

まさ代は明治18(1885)年12月24日、岡山県久米北条郡戸脇村(現久米町)、田淵郷三と鶴の間に長女として生まれる。田淵家は祖父の代から村会議員をしている旧家で父郷三も村会議員をしていた³⁾。またまさ代には、4人の兄弟と2人の姉妹があつた。昭和20(1945)年60歳で日赤本社病院(東京)を引退後は末弟の孟を養子に迎え、生家の隣に家を建て過ごしている。昭和35(1960)年津山中央高等看護学院開院時から1年間あまり学生寮の舎監をしていたが⁴⁾、その後は孟の家族(妻登美子、長男恒男、長女久子)とともに過ごし、孟に先立たれた後は孫(孟の長男)の恒男夫婦が老後の面倒をみており、最後は登美子の看護を受けながら昭和51(1976)年4月7日、91歳の長寿を全うした。

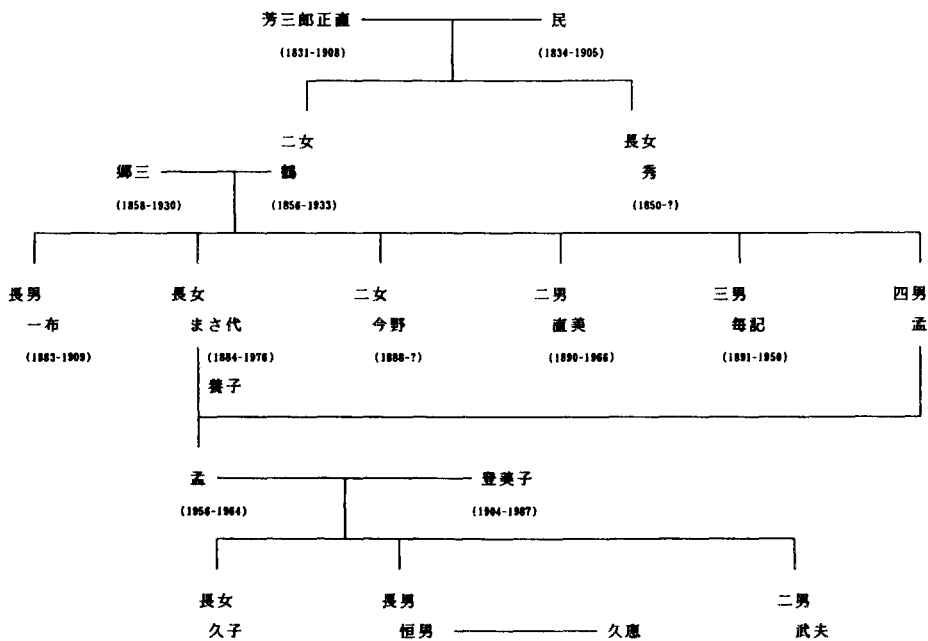


図2 田淵まさ代の家系

小学校は明治25 (1882) 年、6歳で地元の久米郡久米町の秀実小学校 (4年制) に入学、その後、明治33 (1900) 年3月、14歳で秀実小学校の高等科を卒業した。当時の女子教育の現状は多くは裁縫塾であり、津山市史 (第6巻P161)⁵⁾によると「女子教育は一步も二歩も遅れていた。津山 (美作でも) で女学という文字のついた学校は、6 (1873) 年の女学小校が最初である。これが7 (1874) 年廃止になって、高等女学校設立が浮上してくる33 (1900) 年ごろまでの間、女子教育機関が議題になった形跡はない。それは、女子は裁縫塾で結構である、という考えが強かったからである」とある。

この時期にあつて、まさ代は女学校へ進学している。当時津山には、内容的には塾から高等女学校への漸移型というべきものがあり、その1つである私立津山女学校にまさ代は高等科卒業と同時に入学している (第3回卒業生)。両親は子供の教育に田畑を売却するほどの教育熱心なうえに、1歳年上の尊敬する長兄 (一布) は、旧制津山中学卒業後検定で教員資格をとり小学校で教員をしていた。この兄におおいに啓発されたものと考えられる。

また私立津山女学校は創始者竹内文の進歩的な教育観のもとで、当時としては斬新な教育を受けた。ここでの竹内文との出会いや学びがまさ代の生き方や活動の基礎になっているものと考えられる。

女学校当時のまさ代に関する資料は少なく、唯一、『看護史の人々第Ⅱ集』⁶⁾には、当時80歳のまさ代から聞き書きをされ「少時は二里の道程を徒歩で通学したが、まもなく寄宿舎に入って寮生活をする事になり、何の苦勞も知らず幸せな女学校時代を過ごした。」とあるのみである。

まさ代が影響を受けた竹内文と私立津山女学校



図3 女学校時代の恩師
竹内文

竹内文は父 (竹内廉) と母 (潮) の間に慶応4 (1868) 年長女として生まれる。父は教育家であり、津山藩士の出で、竹内家は古流柔術の竹

内流の支流であり、柔術師範として禄を食んだ人である⁷⁾。

文は当時としては異例の向学心に燃えた女性であり、明治7 (1874) 年小学校卒業後は津山変則中学校に入学、入学生が少なく4ヶ月で廃校となったため、明治13 (1880) 年大阪府立中学校に入学6ヶ月修業し、翌年郷里に六郡共立中学が開校したため帰郷し入学、翌年廃校になるまでの間通学し、その後は共立中学で教えていた上原環一郎の時敏学舎で学んでいる。

中学校入学の前年に教育令が公布され男女別学となっており、本来なら文は中学校への入学はできないところを、当時応募者が少なかったのと教育令の主旨が徹底されていない時期であったため、入学できたのであろうということである⁸⁾。

明治11 (1878) 年岡山に西日本の「ミッションステーション」が設置され基督教の布教活動が始められた。基督教のみならず宣教師たちから語学や経済など新しい西欧文明がもたらされた。津山でも明治17 (1884) 年4月から新約聖書の講義が始められ、7月には文の父、廉たちの尽力で伏見町にも講義所が設けられた。伏見町津山講義所である。伏見町津山講義所では同志社神学生、馬場種太郎、松崎謙吉が明治17 (1884) 年から20 (1887) 年まで基督教の講義をした。恐らく、父母とともに通ったであろう講義所で文は将来の夫となる馬場種太郎と出会っている。

当時、同志社以外は日本人による基督教学校は他にはなかった。女性は同志社設立と同じ年の明治8 (1875) 年、米人宣教師タルカット女史により神戸に設立された基督教系の神戸英和女学校の方へ入学していた。

明治18 (1885) 年に文は神戸英和女学校に入学、明治19 (1886) 年神戸教会で洗礼を受ける (父と同じ年)。明治22 (1889) 年同校を卒業した⁹⁾。文は卒業するとその当時札幌独立教会の伝道師であった馬場種太郎と結婚、2児をもうけ、その後同志社に戻った夫と京都で暮らす。一時期、同志社の京都看病婦学校の教師をした。明治26 (1893) 年に種太郎が死去、夫の死後は京都で下宿屋を開き、看病婦学校に勤める傍ら下宿屋をして生活していた。明治27 (1894) 年6月津山に帰り、その翌月から南新座の自宅で英数漢の私塾を開いた。当時津山には女学校はなく、多くは裁縫塾であった。文はたとえ少数でも英語を学ぶ新しい女性を育てる夢を抱いた。女学校を開く手がかりとして明治30 (1897) 年2月そこで津山女学学芸会を開設し、ついで同年9月文部省に女学校設立願いを提出したが、許認可は見送られた。しかし、文は私塾を拡大して津山女学学芸会の名称で、生徒募集を行ってい

る。その間、衆議院議員の立石岐や宣教師ホワイト氏とゴルドン氏の寄付ならびに生徒の月謝に頼り学校を運営したが、学校の経営は苦しかった。津山には明治31(1898)年淑徳館が女学校として認可されている。同じ南新座に2つの女学校が並び立つことになり、2校が生徒募集で鑄を削ったことは想像に難くない。当時の山陽日報明治31(1898)年9月13日付けの記事は次のように報じている。

「津山女子学芸会は創立一昨年にして淑徳館は今春創立せられたり。学校所在のごときは同大字内にありて常になんとなく競争の姿ちらほら見受けられるが学芸会にありては、今期生徒を募集せんとて申込書を津山町大字元魚町万竹堂、東南条郡林田村大字川崎玉置圓次郎方にもうけますます拡張せんとなし居れり。ただ人気の悪きは耶蘇教の宗味ありというにあり。」¹⁰⁾

竹内文が校長の津山女学校は、今回岡山県の教育史関係の文献を探索したが、この学校についての一次史料となる文献は見あたらず、『津山市史6巻』⁵⁾、『津山の人物(Ⅰ)』⁸⁾や、『津山高校百年史上』¹⁰⁾、『作州からみた明治百年上』¹¹⁾、『岡山県教育史下巻』¹²⁾、『都道府県教育史一岡山県の教育史』¹³⁾『山陽学園九十年史』¹⁴⁾などを頼りにまとめた。

また明治32(1899)年10月に「私立津山女学校」として県知事に設立の認可をうるため申請したものが残っており(『立石融文書』)、その年、山陽新報に「私立津山女学校」として生徒の募集をしている。

私立津山女学校には寄宿舎があり、生徒は岡山の全県内に及んでいた。校長(竹内文)は英語、国語などを教え、家事裁縫は叔母の信(当時広島女学院の教師をしていた)が教え、簿記を森本慶三、数学などは川村良次郎等当時の津山中学の先生達が応援している。朝は賛美歌を歌って授業に入り、体操の時間は、立石家(文の協力者立石岐)の庭でオルガンの伴奏でダンスを行ったり、家事、育児衛生など西欧風な合理的なものを教えたとある。また、生徒の多くは日曜日には教会に行き、ここでは津山中学の男子生徒とともに同じ席に座り、そして正月などは男女でカルタ会等を開くなど、当時としてはかなり自由開放的な学校といえた。教会で説かれる「自治、独立、自給」の精神はそのまま文の女子教育の理想となり、自分の体験に照らして女性の自立と開拓心の必要を語り、卒業生にはいつも「己に克て」の言葉を贈ったようである。

この女学校は、若い女性のあこがれの的となり、市内でも名流家庭の娘達がきそって入学をしたとある。この女学校の最大の特徴は英語教育にあった。

明治36(1903)年津山に県立女学校が設立されたので、文は女学校を閉じ単身上京し、津山藩松平家の家庭教師をしていたが、大正10(1921)年12月、54歳の若さで日赤中央病院において生涯を終えている¹⁵⁾。また、竹内文は京都在住のおりの同志社に併設された京都看病婦学校の教師を夫とともにしていることも、まさ代との関わりにおいて注目すべき事項と考えられる。

看護婦時代

まさ代が女学校を卒業した明治37(1904)年は日露戦争が勃発した年である。

「日露戦争のときに女ながらもお国のためにつくしたい、そんなに思うて日赤看護婦を志願しました。」¹⁶⁾とまさ代は雪永に語っている。その年12月、日赤が看護婦生徒の臨時募集をしていることを知り、淑徳女学校を卒業した小学校時代の級友とともに岡山の日赤支部を訪問、看護婦が不足していることを知らされた。しかし、入学願書には父親の承認印と保証人の印が必要にもかかわらず、なかなか両親は承認してくれず、熱心に説得し締め切り当日になってようやく入学願書を日赤岡山支部に提出することができ、しかも父親自ら持参してくれたということである。

明治37(1904)年12月、日赤岡山支部からの委託生として日本赤十字社看護婦養成所に入學。ここで勉強中に戦争は終わることになった。途中二年生の時湿性肋膜炎を患い、6週間帰郷して療養したが、明治40(1907)年12月24日まさ代は優等の成績をもって22歳の誕生日に他の39名とともに卒業式を迎えた。¹⁷⁾そのまま本部病院看護婦としての就職を勧められ就職し、明治44(1911)年3月にはナイチンゲール石黒記念牌を授与されている¹⁸⁾。

このナイチンゲール石黒記念牌は、明治43(1910)年8月13日、フローレンスナイチンゲールが逝去しているが、ナイチンゲールの遺徳を称え、明治43(1910)年当時の軍医総監(のち本社社長、顧問)の石黒忠恵が、本社病院に勤務する看護婦の中でとくに患者の取扱に親切な者に贈って貰いたいと銀牌百個を寄贈されたことによるものである。後に大正7年皇后陛下からの賜金を公債証書にかえて寄贈され、大正7(1917)年10月に「ナイチンゲール石黒記念牌特別会計規則」と「記念牌付与内規」が制定され優秀な看護婦に授与されている¹⁹⁾。

大正元(1911)年8月、勤務卓越部下統率の才幹を認められ婦長に昇進。

大正8(1918)年10月から翌年の11月まで、看護婦になる動機となった従軍看護婦の機会が与

えられ、シベリア派遣救護班の婦長として傷病者の救護にあたった。報知新聞社主催の「白衣の天使従軍座談会」出席者の1人にまさ代があり、シベリア戦争での日本兵の看護の様子を話している。重症の患者で手術室までつれていくことができず、病室で2回も手術をしたこと、その兵士が亡くなる前に宝物と称して牛乳瓶を取ってくれるよう頼んだこと、なぜ宝物なのか。自分が戦線で負傷したおり中隊長がそれに水を入れて飲ませてくれた。間もなく「早く兵舎に行つて働かなければならない」と諭言ばかり言うようになり亡くなられた。私はその宝物に水を入れて屍體室にそなえて差し上げました²⁰⁾。とあり、当時の救護班の看護の様子と看護婦たちの思いが偲ばれる。

この道一筋に生きようと決心したまさ代は、外国人について実地の英会話を修得した。まさ代の残された明治45 (1912) 年の日記をみると、広尾にある英語塾ホワード氏宅に毎週火曜日と木曜日の早朝、友だちと英語学習に通っている。友だちが休んだときは、自分一人でも通ったとある。この点に関して、『看護史の人々第Ⅱ集』²¹⁾によれば、卒業した後、在学中から友人とともにキリスト教会に出入りしていた教会の越智先生から、米国人の婦人教師を紹介してもらい、はじめ週に2時間づつ勤務が終わって指導を受けていたが、週に2回、出勤前朝の1時間、授業を受けるようになった。途中教師が英国人婦人教師に変わり、一緒に学んでいた友人は次々落伍していったが、まさ代は一日も欠かさず通ったとある。そして大正10 (1920) 年には国際公衆衛生看護講習会への参加を命ぜられ、英国ロンドンに1年間留学するまでになった。



図4 第2回公衆衛生看護講習式 受講者とともに
(ロンドンベッドフォード大学に於いて)

またロンドンより帰国後、大正12 (1923) 年4月に仏国パリに御遊学中の北白川宮殿下、同宮妃房子内親王、朝香宮殿下はパリ郊外で自動車事故に遭われ、北白川宮殿下は薨去(即死)され、同宮妃房子内親王、朝香宮殿下は重症を負われご入院されるという惨事が起こった。負傷

された朝香宮殿下、北白川宮妃房子内親王のご看護のため、加藤さんと共に宮内省からパリに派遣され、翌13 (1924) 年2月に帰国。このことは当時の新聞にまさ代の写真とともに大きく報じられている。また『博愛:433号 大正12 (1923) 年5月』には、「貴き使命を荷へる赤十字の二婦長」と題して以下の記事が載せられている。

「遠く佛蘭西なる朝香宮鳩彦王、北白川宮妃房子内親王両殿下の御病床に奉仕する為、二名の看護婦を派遣することゝなつた。宮内省から人格者で、優秀な技術を有し、且つ語學に堪能であると云ふことを條件として日本赤十字社當局に交渉中であつたが、詮衝の結果本社病院に勤務中の婦長田淵政代、同加藤さんの両女史に決定し、両婦長は去る七日宮内省より侍醫寮囑託を命ぜられ、来る十五日神戸出帆の三島丸で、両殿下御見舞のため巴里に差しつかわさる、秩父宮別當、北白川宮御用掛山邊事務官一行に加はつて出発することゝなつた。田淵婦長は日本赤十字社より一昨年九月英京倫敦ベッドフォード大学女子部に開催の赤十字社聯盟主催公衆看護講習會に派遣され、昨年七月同講習の課程を優等にて終了し、其後歐洲各地の病院を實地見學し、十一月帰朝した新知識を有する婦長である、またさきに西伯利亞派遣救護班の婦長として多數看護婦を指揮したこともあり。人格者としてまた優秀の技術者として模範看護婦長である。・・・」²²⁾とある。

大正12 (1923) 年9月1日に起きた関東大震災直後の救護には参加できなかったが、巴里から帰国すると直ちに震災の救護活動に尽くしている。

また看護婦養成業務にも参与し、本社教育調査会委員として研究改善に努力するとともに、救護看護婦長候補生並びに社会看護婦生徒の取締婦長として、指導訓育を任ぜられている。

彼女のこうした功績が評価され昭和12 (1937) 年ナイチンゲール記章が授与された。日本人としては15人目である²³⁾。

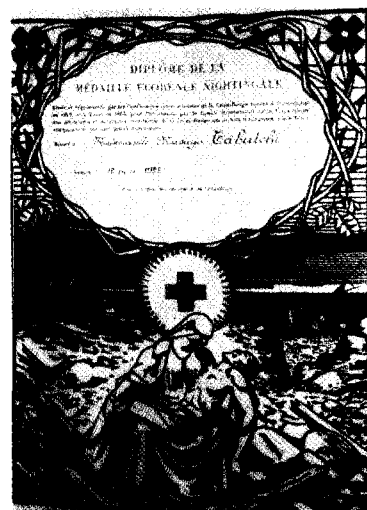


図5 ナイチンゲール章記

続いて昭和14(1925)年には徳川記念章(徳川家達社長が本社社業に功労があったものに授与するために設けた)を受け、現役の間の活躍が推察できる。

内外の信頼が篤く、このような活躍が出来、めきめき頭角を現すことが出来たのも、背景には女学校時代の教養が基本をなしていた。

当時の教科書・教科

日本赤十字社ではアンリ・ジュナンの人道主義、ナイチンゲールの博愛主義の精神のもと明治23(1890)年4月に看護婦養成教育が開始された。当初はまだ、教科書は完備されてなく、講義は講師にまかされ、統一した教科書というものはなかった。そこで日本赤十字社は支部が各地で教育を始めるにあたって、レベルが不統一であってはならないとの思いから平均化を計るための教科書が必要となり、教科書(「看護学教程」)が明治29(1896)年に刊行されている(1988年にその復刻版²⁴⁾が出されている)。明治29(1896)年は日清戦争直後であり、救護活動の実際によって質の良い看護婦の必要性が高まって刊行されたのではないだろうか。

そして教育内容も次第に充実し、まさ代が入学する直前の明治37(1904)年3月看護婦養成の規則が改正され、各支部とも同一規定のもとに教育された。修学年限3ケ年のうち前学期(1ケ年間半)は学科、後学期(1ケ年間半)は実務練習である。

教科書の巻頭言に、日本赤十字社社長伯爵佐野常民は、「ナイチンゲール嬢ノ芳躰ヲ踵キ彼我ノ別ナク傷病者ヲ救護シ・・・」とナイチンゲールのクリミア戦争で敵味方なく、傷病者を救護した事をたたえ、「・・・中略・・・完全ナル応用ノ教科書ナキヲ以テ・・・」とあり、本書によって教育指導したい旨の記載がある。まさ代の入学は明治37(1904)年12月であるから、まさ代はこの看護学教程で教育を受けたことであろう。

目次は、第一編日本赤十字社主旨及び組織から始まり解剖学及び生理学大意、看護法、治療介輔、手術介輔、包帯法、外科機械、救急処置、患者運搬法、衛生法大意、と続いて10編45章からなっている。序論の冒頭における、著者足立寛の解説にはいみじくも看護の学についての記述がある。「看護ノ学タルヤ元来医学ノ一科目ニシテハ医療を輔翼シテ其功績ヲ全カラシメ一ハ病者ヲ慰撫シテ其苦悩ヲ免レシムノ方法ヲ講スルノ学ナリ・・・」と。看護学として百有余年を経た現在もお看護の学として進む方向性はと討議が重ねられているが、草創期の看護に対して「学」を付そうとした学問への深い情

熱を感じる事ができる。また「本邦古来ノ風習ヲノベルニ病者看護ノ如キハ一般ニ之ヲ蔑如シ不学無識ノ卑賤婦ニ一任・・・」とあり、わが国の古来の看護者のなり手の風習を考えると、一般的には、さげすむ見方で不学無識の卑しい年増女が看護に当たっていたのは間違いで、日本赤十字社は皇后陛下のご加護を得て、万国赤十字社と提携して深い学問と高い教養を身につけた看護婦を目指した開学の理念が示され、そうした理念に基いて高い専門教育を受けていた。また当時から国際性も考えられ随意科として外国語も取り入れられている。まさ代の英語学習は女学校時代から引き続いたと考えられる。

業績

1) 大正10(1921)年(35歳)：日赤看護婦外国留学第1号

第2回公衆衛生看護講習会(英国倫敦ベッドフォード大学)に派遣される。

このことについては、『博愛415号、大正10(1921)年6月10日』に以下のように報じられている²⁶⁾。

「昨大正九年三月瑞西國ジュネブに於て赤十字社聯盟第一回總會開催の際、各國赤十字社の事業の一として公衆衛生看護婦養成のことが決議され、同年十月各社に於て選抜した講習員を英國倫敦の王立女子大學へ派遣することになった。我赤十字社に於ても之れに参加し講習員の派遣を計劃したが、期日の切迫の為遂に其の運びに至らなかつた。然るに今年も亦同じ主意にて本社からも一名の講習員派遣を聯盟から勧誘して来たので取調の結果、岡山支部看護婦長田淵まさ代を適任と認め講習員として倫敦に派遣することに内定されたそうだ、同子は来七月頃横濱出帆のクライスト号に便乗し英國に向ふそうである。

赤十字社聯盟及王立女子大学に於て定めたる講習生の入學資格は左の如し

年 齡	二十三歳—三十歳
教 育	十八歳まで連續して正則の教育を受けたる者
看護教育	其國にて最高程度の看護婦學校生徒卒業證を有する者
健 康	身分品行能力秀越の者
言 語	英語に熟達し講義を筆記しうる者
學 期	自十月至七月

講習生は病院内に寄宿し講習終了後は證明書を授與せられる。學科目は左の如し

學 理	心理學
-----	-----

細菌學
 家政學 家事 洗濯 料理
 衛生學 小児 一般 個人
 實 験
 小児保護法
 學校臨床法
 結核病救護法
 田園地救護法
 區内巡回看護法
 修學旅行
 社會事業に關して慈善團體各種學校
 幼稚園より異常小學校、區内看護協
 會、各國民居留地、小児保護各種一、
 一般看護、病院其他」

ただし講習会の場所は後日王立女子大学から
 ベッドフォード大学に変更されている。

2) 体育及び運動・外国語教育の進言

前述の「第2回公衆衛生看護講習会」の報告書²⁶⁾ ²⁷⁾が『國際的公衆看護講習狀況並視察報告一
 日本赤十字社病院看護婦長田淵まさ代』として
 『博愛：428号、大正11(1922)年12月10日』に掲
 載されている。報告書において講習の概要、講習
 後の見学：ガイ病院(ロンドン)、ウイルヒョ
 ウ病院、アウグストビクトリア病院(ベルリン)、
 ラリボアゼール病院(パリ)などに加え、「各
 所見聞」の中では、ロンドンガイ病院看護婦に
 ついては養成科目や経費及び修業年限や卒業後
 の待遇、服装や業務など細かく報告されており、
 また巡迴看護については、キングストン看護婦
 協會における活動が報告されている。そして「所
 感」の中では、先国の社會衛生の發達、學校看
 護婦巡迴看護婦用事保護所等の行動設備など我
 國にも益々發達し殊に巡迴看護の方法が普及し
 たならば資産の乏しい家庭の為には至極便利に
 て一家より延いて社會の為に幸福を與ふこと
 と思ひます、低脳児保護等も同様であります。
 と我が國の看護行政への提言や服装への提言(特
 に看護帽、制服と看護衣、冬服夏服の必要性)
 など、外国での見聞をもとにこれまでの問題点
 をあげながら述べている。

また、体育運動の必要性については、「女子
 の体育は一般に盛であります看護婦同生徒の
 体育にも頗る熱心でテニス、を初め種々の運動
 が能く行われてゐます日本の女子は殊に体格の
 點で劣って居りますから大に運動の奨励が必要
 と思ひます。」と述べ、外国語教育については、
 将来の國際的講習会への派遣者の準備として自
 分の例を引きながら「将来國際的講習會などに
 派遣さるゝ者は特別に素養のある者の外は一、
 二年間前から殆んど専門的に語學を修め先方に
 て講義其の他を能く了解し得るやう適當の教養

を受くるを要すると思ひます」と述べている。

まさ代は女學校時代の英語能力のうえに、看
 護婦養成時代並びに卒業後も外人について英会
 話を学んでいた。しかし「第一に不自由を感じ
 た。」と報告している。せつかくの留学での学
 びを効果あるものにするため、痛切に語学力の
 必要性を感じたのであろう。

これまでなかった看護婦の教育課程に英語が
 組み入れられ、大正15(1926)年に内地留學生
 制度(日本赤十字社看護婦外国語學生規則並に
 修學規定)が取り入れられ、津田英語塾に留学
 させる制度ができた。

『同方創刊号』によると大正15(1926)年第1
 回外国語學卒業生には当時救護看護婦長の井上
 夏枝、山田ナル、高橋タカノ、第2回卒業生に救
 護看護婦の是石ミワ、井上澄恵、救護看護婦長
 の桑原カヲリ、第3回救護看護婦林 塩、山本広
 恵らの記録がある。この制度で学習した井上夏
 枝はまさ代に続いて昭和3(1928)年、英国ロン
 ドンで開催された國際公衆衛生看護講習會に参
 加している²⁸⁾。

また、まさ代の報告書には、「各國より此の
 講習に集まりました看護婦は概して快活で體格
 もよく健康でありました、學問の程度は中等教
 育を経たものと思はれました、看護上の技能は
 十分に比較する機會が乏しくありましたが、そ
 の所見を率直に申しますれば各國看護婦を我々
 に比較しますれば体格が大きいから力業は優り
 ませうが働く程度は同じ位と申しませうか決し
 て我々が遜色あるものと思ひませぬ殊にやさ
 し味多く能く氣をつけることなどは我々の方が
 優るとも劣らぬと思ひました、又我々の方が團
 体の責任觀念が深いやうに思われた點もありま
 す。」と各國と我が國の看護婦を比較してブラ
 イドと自信を強めた記述や、「次に内地に於て
 公衆衛生に關係深き各場所は十分に視察し置く
 ことが肝要と思ひます・・・」との記述があり、
 後進への適切な助言となっている。

3) 救護看護婦長及び社会看護婦養成

社会看護婦の必要性については、『博愛第477
 号昭和2(1927)年2月10日』に当時の本社理事
 大久保利武が「公衆衛生看護婦の養成に就いて」
²⁹⁾と題して「近時に於ける社會問題の中樞とな
 るものは經濟問題と共に衛生問題であつて、疾
 病の豫防、苦痛の輕減、健康の増進とか云ふこ
 とは如何なる社會事業にも伴って行く問題であ
 るから、単に戦時に於ける衛生事業のみならず、
 又深く将来を考えるとこれ有って初て徹底した
 る解決は出来るやふに思われる。従つて看護婦
 の養成とか教育とか云ふことについても、時勢
 の進運に相應して施設すべきことであると思
 ふ。」と述べている。

大正10(1921)年第10回赤十字国際会議の決議事項に公衆衛生看護事業がとりあげられ、我が国では其の翌年から教育に衛生、看護婦に必要な法規、社会的看護事業などの科目が加わったが、まさ代の公衆衛生看護講習会の報告での進言とともに、大正14(1925)年等々力婦長が出席した第5回国際看護婦大会での重要議題に、また東京で開催された東洋赤十字会議の重要問題に公衆衛生看護婦養成があがっているように社会的な要請のたかまりがあつたことがわかる。

現在の保健婦教育のさきがけとも言える社会看護婦生徒養成は昭和3(1928)年から12(1937)年まで行われるが、まさ代は救護看護婦長候補並びに社会看護婦生徒の取締婦長としてこれらの指導訓育にあたっている。

ちなみに、昭和6年の日本赤十字社病院年報³⁰⁾では第1学年3学期に“包帯法復習”を担当しているとの記載がある。

日本赤十字社は社会看護婦生徒養成について『同方創刊号』に以下の文章を載せている。³¹⁾

「日本赤十字社は明治二十三年以来救護看護婦を養成しつつあるが、最近平時事業の進展に伴ひ、社会看護婦の必要を認め、来る十月一日より本社病院に於てその養成を開始することに決定した。養成期間は一ケ年にして同志願者の資格は、年齢三十年未満の、救護看護婦長又は救護看護婦であつて、高等女学校卒業者若くはこれと同等以上の學力を有する者にして、身體強健なる者である。

社會看護婦生徒教授課程表

- 一、公衆看護總論(歴史、目的、組織、其他) 三十時間
 - 一、個人衛生(身體衛生、精神衛生、飲食物住宅及被服、其他) 六十時間
 - 一、集團衛生(學校、工場、都市、農村、其他) 七十時間
 - 一、社会的疾病の豫防(急性傳染病、結核、癩、性病、トラホーム、寄生蟲、精神病、酒精中毒、職業的疾患、其他) 七十時間
 - 一、妊産婦及乳幼児保護 六十時間
 - 一、細菌學、排泄物検査法 六十時間
 - 一、社会事業(概論、各論) 三十時間
 - 一、家政學 二十時間
 - 一、教育學 二十時間
 - 一、心理學 二十時間
 - 一、經濟學 二十時間
 - 一、家政學 二十時間
 - 一、統計 十時間
 - 一、法規 二十時間
 - 一、體操、音楽 各四十時間
- {備考} 以上の外、國語、外國語、寫眞術、
 圖書を授け又講話法の實習を行はしむ。前半期

は主として學科の教育施し、後半期は實務練習及び實地見學をなさしむ。」

ちなみに公衆看護總論(歴史、目的、組織、其他)30時間は2人目の国際公衆衛生看護講習会に出席した井上夏枝が本社囑託として担当している。

おわりに

日本における近代看護の草創期にあつて、岡山の一地方出身である田淵まさ代は英語の必要性に気付き、生徒時代からひき続き看護婦となつてもその修得に努力してきた。そして大正10(1921)年、まさ代の看護実践は言うに及ばず英語の実力を認められ日赤看護婦として初めて英国への留学の機会が与えられた。留学の経験が彼女の看護における視野を拡げ、これからの看護教育に対する提言となつて日赤の看護婦養成に影響を与え、また後進の活動にも影響を与えた。今回の研究の目的は看護婦としてのまさ代の業績とその動機づけとなり支えたものは何かを求めるところに置いている。筆者らは女学校時代竹内文との出会いが大きいと考えた。竹内文と私立津山女学校に関しては一次史料が乏しく、今後の課題として残る。しかしまさ代は文の晩年まで親交をもち、文の最期はまさ代をたより日赤中央病院であつたとのことであり、今後はまさ代と文との関係を裏付ける一次史料の探索を続けたい。また本稿は主にまさ代の現役時代について纏めているので退職後の生活については、第二稿に譲りたい。

最後に本研究に関してご協力いただいた日本赤十字社資料室、吉川龍子先生をはじめ田淵恒男さん、竹久久子さんに感謝いたします。

なお本研究は文部省科学研究費補助金基盤研究(C)の助成を受けて実施したものの一部である。

文献

- 1) 雪永政枝. 看護史の人々第II集. 東京, メヂカルフレンド社, 1-13, 1970
- 2) 亀山美知子. 近代日本看護史I. 東京, ドメス出版, 182-192, 1997
- 3) 雪永政枝. 看護史の人々第II集. 東京, メヂカルフレンド社, 2, 1970
- 4) 津山中央看護専門学校編. 創立20周年記念誌. 津山, 津山朝日新聞社, 36-37, 1980
- 5) 津山市史編纂会. 津山市史第6巻. 現代1, 津山, 津山朝日新聞社, 161-163, 1980
- 6) 雪永政枝. 看護史の人々第II集. 東京, メヂカルフレンド社, 2, 1970
- 7) 津山高校同窓会. 津山高校百年史上. 津山,

- 津山朝日新聞社, 1995
- 8) 小山健三ほか. 津山の人物 (I). 津山, 津山文化協会, 101-104, 1990
 - 9) 神戸女学院同窓会. 神戸女学院同窓会誌めぐみ12号. 神戸, 以文会, 1885
 - 10) 津山高校同窓会. 津山高校百年史上. 津山, 津山朝日新聞社, 1995
 - 11) 小山健三. 作州からみた明治百年上. 津山, 津山朝日新聞社, 97-103, 1970
 - 12) 岡山県教育史刊行会編. 岡山県教育史下巻. 東京, 日本教育新聞社, 1961
 - 13) 倉地克直ほか編. 都道府県教育史一岡山県の教育史. 京都, 思文閣, 1988
 - 14) 山陽学園編. 山陽学園九十年史. 岡山, 日本文教出版, 1974
 - 15) 森本謙三編著. 明治初期津山周辺で基督教を受け入れた人々. 社会教育研究 No. 5, 24-26, 1985
 - 16) 雪永政枝. 看護史の人々第Ⅱ集. 東京, メヂカルフレンド社, 1, 1970
 - 17) 日本赤十字, 35, 1908
 - 18) 日本赤十字社岡山支部. 日赤岡山県支部百年の歩み, 86-87, 岡山日赤岡山県支部, 1990
 - 19) 日本赤十字社. 日本赤十字社社史稿 第5巻, 東京, 日本赤十字社, 320-321, 1969
 - 20) 同方, 昭和13年9月号, 5-13, 1938
 - 21) 雪永政枝. 看護史の人々第Ⅱ集. 東京, メヂカルフレンド社, 1-13, 1970
 - 22) 博愛, 433, 22, 1923
 - 23) 博愛, 603, 17-21, 1937
 - 24) 坪井良子編. 近代日本看護名著集成第6巻 日本赤十字社看護学教程. 東京, 大空社, 1988
 - 25) 博愛, 415, 10, 1921
 - 26) 博愛, 428, 15-18, 1923
 - 27) 田淵まさ代. 国際的公衆看護婦講習並視察報告. 博愛, 428, 別項1-42, 1923
 - 28) 同方, 創刊号, 88, 1928
 - 29) 博愛, 477, 3-5, 1927
 - 30) 昭和6年日本赤十字社病院年報, 38, 1931
 - 31) 同方, 創刊号, 88, 1928
 - 32) 永瀬清子ほか. 近代岡山の女たち. 東京, 三省堂, 1987
 - 33) 日本赤十字社医療センター百年史編集委員会. 日本赤十字社医療センター百年の歩み. 東京, 日本赤十字社医療センター, 1991

The personality and life of Masayo Tabuchi, the first Japan Red Cross Nurse to study abroad(1)

Noriko TAMURA , Hiroko TUKAHARA and Setuko TAKATA

Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

Abstract

Masayo Tabuchi was a woman who was active at the dawning of modern nursing in Japan. At the First General Conference of the League of Red Cross Societies held in 1920, it was decided to train and develop public health nurses as one of the operations of the national Red Cross Societies, and students were dispatched from various nations to the first International Seminar of public health nursing. Japan refrained from sending students at this time because of the lack of time for preparation. However, Masayo Tabuchi participated in the second Seminar in 1921, because she had studied English earnestly since her high school days and was proficient in it. After returning to Japan, she wrote a report of what she learned at the seminar and the state of nursing at institutions in various parts of Europe that she saw or heard about. Then she made some proposals. Among them, she stressed the need for English education and urged the establishment of a program for studying abroad. Many nurses trained in this program later became active internationally. She was also engaged in the training of first-aid nurses and public health nurses. She was dispatched to nurse Princess Kitasirakawa, who was injured in an accident in Paris. She filled the role of the head nurse in the relief squad sent to Siberia. Because of these services, she was awarded a Nightingale badge in 1937.

Key words : Masayo Tabuchi, domestic student exchange system, nurse of Japan Red Cross, public health nursing